

建文帝の諡号について (7)

Evaluating Ming Emperor Jianwen
from the Perspective of his Posthumous Title (7)

滝 野 邦 雄
Takino, Kunio

(3)

清王朝が編纂を命じた『明史』には、建文帝の本紀が立てられているが、明の萬曆年間に明朝の通史の編纂が企画された時には、建文帝の本紀は立てられなかったようである。すでに検討した呉道南（字は會甫，諡は文恪。江西崇仁の人。萬曆十七年己丑科（一五八九）一甲二名の進士）の「正史議」によれば、建文帝や景泰帝の位號は復活を命ぜられたものの、その「本紀」作成は行なわれなかったという。

建文・景泰の位號は、題を経て復すし、「實錄」に附載すること有りと雖も、
[建文帝・景泰帝の] 專紀は待つ有り（『呉文恪公文集』卷之二・二葉・「正史議」）。

もともと、焦竑（字は弱侯，号は澹園。南京旗手衛・江寧の人。嘉靖二十年（一五四一）～萬曆四十五年（一六二〇）。萬曆十七年己丑科（一五八九）の狀元）の「修史條陳四事疏」によると、建文帝の本紀を立てるべきだとの提案は行なわれていた。

一 本紀の當に議すべきこと。 國朝の「實錄」 代々修めらる。[しかし]
建文・景泰の二朝の如きは、少なき者 四年に垂なんとし、多き者は七八年なり。向より專紀無し。景帝の位號は題を経て復すと雖も、「實錄」に附載さる。未だ是れ正しきと爲さず。夫れ勝國の君人（国君）は必ず紀を

爲るに、其の臨御の一時を以てすれば、猶お泯没し難し。所謂ゆる國は滅ぶ可し、史は滅ぼす可からざるなり。況や本朝に在りては、乃ち之をして孫（建文帝）祖（太祖洪武帝）の號を蒙らす・弟（景帝）兄（英宗）の年を襲わしめんや。名實 相い違ふ。傳信 何に據らん。此れ當に創爲すべき所の者の一なり……（『焦氏澹園集』卷之五・八葉・「修史條陳四事疏」）。

清代になってからは、談遷は、清・順治十年（一六五三）前後に成ったと思われる（中華書局刊『國榷』所収の一九五五年張宗祥の「題記」による）『國榷』において、建文帝元年から四年の事績を、卷十一から卷十二に「惠宗建文元年～四年」として収めている。

康熙十一年（一六七二）に成った『罪惟錄』においても、「惠宗帝紀」が立てられている。傅維麟（原名は維楨，字は箇臣。後に名を維麟，字を飛曙に改める。号は掌雷，又の号は歎齋。直隸靈壽の人。明・萬曆三十六年〔一六〇八〕～清・康熙六年〔一六六七〕。順治三年丙戌科〔一六四六〕二甲六十二名の進士）は、康熙三十四年〔一六九五〕に刻された『明書』卷四でも「本紀二」として「建文皇帝本紀」を立てている。

また、朱彝尊（字は錫鬯，号は竹垞。浙江秀水の人。崇禎二年〔一六二九〕～康熙四十八年〔一七〇九〕。康熙十八年己未科博學鴻儒（一六七九）の第一等十七名）は、「史館上總裁第四書」で、編纂された「建文帝紀」を見たという。康熙年間に行なわれていた『明史』編纂事業で、すでに建文帝の本紀を立てることになっていたのであろう。

この背景には、王朝が代わったために永樂帝への評価に変化がおこったと考えられる。そもそも建文帝を追い落した永樂帝自身は、高祖洪武帝から直ちに正統性を受け継いだと主張した。そしてその永樂帝の子孫が代々皇位を継いだ明政権であったため、建文帝の存在を否定し続けなければならなかった。だが、清政権はそうしたことは考慮しなくてもよかった。

たとえば、彭而述（字は子錢，号は禹峰。江西新喻（河南鄧州）の人。？～康熙六年（一六六七）：卒六十歳。崇禎十三年庚辰科（一六四〇）三甲

一百八十五名の進士)は、『明史斷畧』(康熙元年(一六六二)自序)の「入正大統」条で、永樂帝と唐の太宗とを比較して、つぎのようにいう。

革除の際[のことは]、余(彭而述) 忍びて之を[つぎのように]言う。[永樂帝は] 既已に入りて大統を正せり。即ち革除せざるも害無きなり。革除なる者は、之を恨むなり。既已に之を恨めば、則ち建文 在るが若きも、安くんぞ復た[周公に補佐された]成王と爲るを得んや。帝位を固辭して、居らざる者は、皆な假なり。[方] 孝孺は指斥(斥責)し、景清は犯駕して、罪 其の身に及ぶ。[これは] 以て君に事うる者の勧めと爲す。亦た可ならずや。顧だ乃ち九族に連及し、鄰封(鄰地)に累及す。坐して外(死)す者は数千百人なり。慘ましきかな。胡[惟庸]・藍[玉]の變もて、太祖 功臣を前に摧き、靖難の師もて成祖(永樂帝) 復た諸賢を後に摧く。世 安くんぞ復た節義を食するの報を得んや。然れども諸君子 此れを以て名を成し、成祖(永樂帝) 是を以て累徳(徳行を損う)す。成祖(永樂帝)の行事を跡づけるに、大いに唐の太宗に類す。其の親身から陣に臨むも、亦た之に類す。然れども[唐の]太宗の天下は、自ら之を爲す。其の父の李淵は與かる無し。故に六月四日の事は、直書するを妨げず。且つ建成・元吉 罪を宮闈の擧に得。「大義 親を滅す」(『左氏傳』隱公四年)るは、世を異にするも猶お或いは之を非とす。成祖(永樂帝)の靖難の師に在りては、既に已むを得ずに迫られ起き、聊か以て禍を避けん、と云う。[それならば] 獨り太祖の子・兄弟の賢なる者を擇びて、之を主とする可からざらんや。天下は太祖の天下なり。[唐の]太宗と同じからざるなり。周王[橐]・齊王[榑] 皆な可なり。何ぞ必ず身自(自身)から之を爲さん。是に由りて之を言え、[唐の]太宗に及ばざること遠し。

唐の天下は太宗の手に得。即ち天下を以て太宗に傳えるは過ちに非ざるなり。建成・元吉 既に太伯・仲雍と爲る能わず、反って潜かに太宗を圖らんと欲す。[だから]太宗 之を取るは正し。成祖(永樂帝)は太祖の子に非ざるなり。太祖の賊なり。建文の年號を革除し、并せて洪武

も亦た革除す可し。直ちに名義に逼るは不可なるのみ。又た何ぞ方〔孝孺〕・景〔清〕を滅すると周〔王樞〕・齊〔王搏〕を立てざるとを待ちて後に其の假なるを知らんや。三百年の國祚あるは寔に天意の問う可からざるなり（康熙元年（一六六二）自序『明史斷畧』二卷・「入正大統」条・九葉～十葉）。

永樂帝は、皇位を得たのであるから、いわゆる革除しなくても害はなかったはずである。革除とは、建文帝を恨むことである。恨んでいるのであるから、建文帝がそのままであっても、周公に補佐された成王のようにはなれない。帝位を譲ったとは、假のことである。また、多くの臣を滅ぼした。臣たちはそれで名を成したが、永樂帝は徳行を欠くことになってしまった。永樂帝の事績を考えると、唐の太宗に似ている。ただし、唐の太宗は自分で天下をとったのである。したがっての兄の李建成と弟の李元吉を倒した玄武門の変は、直書してもかまわないし、非難することもできる。永樂帝が兵を起こしたのは、迫られてやむをえず、禍を避けるためであったという。それならば、太祖洪武帝の子弟の賢なるものを択んで、それに天下をあたえればよかった。天下は、太祖洪武帝の天下である。どうして、自分から天子となったのか。こうしたことからすると、唐の太宗に遠く及ばないのである。さらに、唐の太宗が天下を受け継いだのは正しい。それに反して、行なったことからすると、永樂帝は、太祖洪武帝の子ではなく、賊である。しかし、三百年にわたってその系統が続いたのは、天意であったのだろう。

また、陸隴其（初名は陸龍其。字は稼書、諡は清獻。浙江平湖の人。明・崇禎三年十月十八日（一六三〇年十一月二十一日）～清・康熙三十一年十二月二十七日（一六九三年二月一日）。康熙九年庚戌科（一六七〇）二甲七名の進士）も同様のことを述べている。

金川の事は、建成・元吉の事と異なる無しとするに至れば、君子 貞觀の治を以てしても輕がるしく〔唐〕太宗を恕さざれば、則ち永樂の治を以てして曲さに成祖を諱まざる能わず。瑕瑜と雖も、掩わず。可なり（『三魚

堂文集』外集・卷二・「明史」)。

さて、王鴻緒(初名は度心。字は季友、号は儼齋、また横雲山人と号す。江蘇華亭の人。順治二年(一六四五)～雍正元年(一七二三)。康熙十二年癸丑科(一六七三)一甲二名の進士)によって雍正元年(一七二三)に進呈された『明史藁』は、「建文帝紀」を立てる。ただし、この時期には、まだ建文帝に「恭閔惠皇帝」の尊号は贈られていないので、「建文」の年号を帝号としている。

この『明史藁』はあくまで稿本であるため「贊」は附せられていない。しかし、つぎのように述べて、明朝でも建文帝の子孫によって建文帝の父の懿文太子の祭祀を執り行うこと、「建文」の年號の復活と、廟號の選定を求める提案がなされたことが最後に詳しく記される。

……弘治(一四六五年～一四八七年)中に台州の人の繆恭 絶えたる屬を繼ぎ建庶人(建文帝の少子の文圭。英宗の天順元年(一四五七)十月まで幽閉される)の後を封じ、懿文太子の祀を奉せしめんことを請う。有司[繆]恭を[獄に]繋ぎ以て[孝宗弘治帝に]聞す。[すると孝宗弘治帝は]詔して問うこと勿れとす。萬曆十六年、司業の王祖嫡「建文」の年號を復せんことを請う。閣臣の申時行等「建文」の年號は相い傳えて以て革除と爲すと言う。然れども考えるに成祖「實錄」に仍お「元年」・「二年」・「三年」・「四年」と稱す。實に未だ嘗て革除せざるなり。[しかし]議(提案)遂に寝む。[萬曆]二十三年、詔もて國史を修めるに命じて高皇帝紀の後に附載し、其の年號に仍らしむ。而れども[國]史 卒に成らず。崇禎四年、工部郎中の李若愚 建文の廟[号]・諡[号]を定めんことを請う。禮部に下し、議 果たして行なわれず……(敬愼堂刻『明史藁』本紀四・「建文帝」・八葉)。

これが欽定『明史』になると、

正徳・萬曆・崇禎の間、諸臣「建文」帝の後を續封せんことを請いて、廟[号]・諡[号]を加えることに及ぶ。皆な部に下し議せしむるに、果たして行なわれず。大清の乾隆元年(一七三六)、廷臣に詔して集議し、「建

文帝に] 追諡して「恭閔惠皇帝」と曰う（『明史』巻四・本紀第四・恭閔帝）。となる。

これは、『明史藁』進呈の段階では、清政権は建文帝に諡号を贈っていなかったもので、それを促進する意味を込めて、明代においても名誉回復の動きがあったことを示したかった。ところが欽定『明史』の成立した時には、公認の諡号が贈られたので、記述は簡略になり、最後に清政権が諡号を贈った事実が記されたと考えられないだろうか。

さらに、建文帝の最後については、『明史藁』では、つぎのように記す。

俄に宮中に火 發し、[建文] 帝及び皇后馬氏 崩ず。燕王（永樂帝） 哀を龍江に發し、天子の禮を以て葬祭す。或いは言う、[建文] 帝 地道より出亡すと（敬愼堂刻『明史藁』本紀四・「建文帝」・八葉）。

それが欽定『明史』では、

宮中に火 起こり、[建文] 帝 終わる所を知らず。燕王（永樂帝） 中使を遣りて [建文] 帝・[皇]^① 後の屍を火中より出さしむ。越えて八日壬申に之を葬る。或いは言う、[建文] 帝 地道より出亡すと。

①建文帝の馬皇后とも理解できるが、『明史藁』の記述を踏まえているならば、建文帝と馬皇后の意味ではないだろうか。ただし「[建文] 帝 終わる所を知らず」を前後矛盾なく理解するには「建文帝の馬皇后」としたほうがよいようにも思える。

となる。『明史藁』では、「[建文] 帝及び皇后馬氏 崩ず」と明確に記されていたものが、建文帝出亡（逃亡）説を受け入れて「[建文] 帝 終わる所を知らず」とされる。また、『明史藁』では永樂帝は「哀を龍江に發し、天子の禮を以て葬祭す」とされていたものが、「之を葬る」だけに変更されて永樂帝の建文帝に対する厳しい態度を示す記述に変更されている。

『明史』の編纂に雍正年間に参加した汪由敦（字師敏，号は謹堂。浙江錢塘の人。康熙三十一年（一六九二）～乾隆二十三年（一七五八）。雍正二年甲辰科（一七二四）二甲一名の進士）はいう。

或いは謂う、懿文太子は、建文 嘗て尊びて「興宗孝康皇帝」と爲す。宜

しく『元史』の例を用いて、[世宗嘉靖帝の父の]興獻帝^① 合わせて一傳と爲せ、と。⁽¹⁾ 辨じて曰く、興宗・睿宗は皆な尊稱の詞なり。身の帝と爲る者と異なり有り。史 亦た從いて之を宗とし・之を帝とすれば、名實^{みだ} 紊る、と。

然らば則ち成祖（永樂帝）の革除に與せんや。曰く、成祖（永樂帝）の革除に與からず。「興宗」と稱して後に著わるを待たざるなり。即ち「興宗」と稱すれば、又た以て成祖（永樂帝）の革除の實を著わす無きなり。「建文」を[本]紀とすれば、成祖（永樂帝）の罪 著らかなり。成祖（永樂帝）を罪するは、懿文太子を帝とするに在らざるなり。其の生まれるや、太子なり。其の葬られるや、太子の禮を以てす。之を正して太子と曰うは、其の實を得。「宗」と曰い、「帝」と曰う者は、臣子の辭なり。即ち成祖（永樂帝）の革除なる者無ければ、後世の史氏は亦た必ず從いて之を宗とし・之を帝とせず。「興獻王」の「宗」と稱して廟に入れるは、禮に非ざるなり。「興宗」を帝とし、祖（永樂帝）の革除に與からざると謂う者は、「興獻」を帝とするを以て世宗（嘉靖帝）の能孝に與かると爲すなり……（『松泉集』卷二十・「史裁蠡說・附辨說一條」）。

①嘉靖帝は、傍系より皇帝の位についたので、父の興獻王は皇帝になっていない。

建文帝の父の懿文太子と世宗嘉靖帝の父の興獻帝とをあわせて一つの傳をたてるべきだという提案に対して、汪由敦は、兩人とも皇帝となっていないので「宗」や「帝」をつけるのは名と実とが乖離するという。すると、懿文太子の「興宗孝康皇帝」の称号を抹殺した永樂帝の革除を認めるのかということに対して、

(1) 欽定『明史』では、后妃列傳と諸王列傳との間に、「興宗孝皇帝」・「睿宗獻皇帝」に二人を合わせた列傳が立てられている。その贊には、つぎのようにいう。

贊に曰く、興宗・睿宗 未だ嘗て身は天子と爲ずと雖も、尊號・徽稱の典禮 具備すれば、其の實は混ぶべからざる容き者有り。史なる者は、事を記す所以なり。事を記せば必ず其の名と實とを核にす。「宗」と曰い、「帝」と曰う者は、當時 已に定むるの名なり。名 定まりて實 著わる。爰に『元史』の裕宗・睿宗列傳の例に據りて、別に一卷を爲すこと右の如くし、而して各々 后を以て附す（『明史』卷一百十五・列傳第三・「興宗孝康皇帝孝康皇后 呂太后 睿宗獻皇帝獻皇后」）。

汪由敦は、称号を復活しなくてもよい。建文の本紀を編纂すれば、それで永樂帝の罪を明らかにできるというのである。

欽定『明史』では、こうした考えから永樂帝にたいして厳しい記述がなされている。

さて、欽定『明史』が成る直前の乾隆元年（一七三六）六月八日に、乾隆帝は、建文帝に諡を贈ることを命ずる。

〔乾隆元年（一七三六）六月〕辛未（八日）、明の建文帝に諡するを議することを命じ論するに、名に易うるに諡を以てするは、古の制なり。周公の定めて諡法と為してより、後世の帝王、未だ諡無き者有らず。明の建文は太祖の嫡孫為りて、大統を續承し、在位すること四年なり。固より儼然たる天下の共主（天子）なり。成祖（永樂帝）既に立ち、其の天下を有つに及び、並びに其の年號を去る。而して史官の書する所は、則ち仍お稱して建文元年・二年・三年・四年と為す。此れ國の頼る所の信史有ればなり。然れども之に係けるに諡を以てせずして、稱して「建文皇帝」と曰う。此れ俗稱なり。史體に非ざるなり。之を後世に傳えるは、殊に闕典と為す。之を〔明の〕太祖の元の天下を有ち、元主に諡して「順帝」と為し、我が世祖章皇帝（順治帝）、明の天下に代わり、明主（崇禎帝）に諡して「愍皇帝」と為すを考えるに、更姓改物（王朝を交代させてしまう）の君と雖も、尚お且つ追諡するは、嫌忌する所無し。況んや其の世に當る者をや。宏（弘）治〔年間（一四八八年～一五〇五年）〕以來、楊循吉諸人の如きは、屢しば以て請を為すも、寢めて行なわずに迄ぶ。皆な後世の子孫を以て、席（繼承）成祖の業有り、故に敢て舊章を變亂せず、而して其の譏りを來世に貽るを慮らざるなり。我國家 崇禎に諡して、建文に諡せざる者は、「明史」の未だ竣せざるを以てなり。時に當りて急ぐ所に非ず。今、史書 既に成りて、若し此の追諡に及ばざれば、良に遺憾と為す。大學士・九卿に著して會議せしめ、確擬もて具奏し、朕の親から裁定を加えるを候て（『大清高宗法天隆運至誠先覺體元立極敷文奮武孝慈神聖純皇帝實錄』卷之二十・

「乾隆元年（一七三六）六月辛未（八日）」条。

乾隆帝はいう。建文帝は正統な天子である。しかし、永樂帝によって「建文」の年号は取り払われた。そして、諡を贈らずに「建文帝」とした。だがこれは、俗称である。諡をそのままにしておくのはよくない。明の太祖洪武帝は、追出した元の皇帝に「順帝」と諡したし、清では順治帝が明の崇禎帝に「愍皇帝」と諡した。王朝が代わったのであるから、なにも忌避する必要はない。これまで建文帝に諡していなかったのは、『明史』編纂が成らなかったからである。『明史』が完成しながら、諡を考えなければ遺憾なことになる。そこで、大臣たちに諡を提案させて、乾隆帝が裁定する、というのである。

翌月には、建文帝に「恭閔惠皇帝」という諡号を贈ることが決定する。

〔乾隆元年（一七三六）七月〕辛亥（十九日）、明の建文皇帝を追諡して、恭閔惠皇帝と為す（『大清高宗法天隆運至誠先覺體元立極敷文奮武孝慈神聖純皇帝實錄』卷之二十三・「乾隆元年（一七三六）七月辛亥（十九日）」条）。そして、乾隆四年（一七三九）七月二十五日に『明史』が告竣恭呈される。そこでは建文帝に対して「恭閔帝（目録には「惠帝）」とし、本紀が立てられる。その贊にはつぎのようにいう。

贊に曰く、惠帝^① 天資仁厚なり。踐阼の初め、賢に親しみ學を好み、方孝孺等を召用す。典章制度は、銳意に古に復す。嘗て病に因りて晏朝（朝遅くなって政務をとる）す。尹昌隆 進み諫む。即ち深く自ら引咎（過失を認める）し、其の疏を中外に宣す。又た軍衛（衛所）の單丁（兄弟のいない男子）を除き、蘇・松の重賦を減ず。皆な民を恵むの大なる者なり。乃ち革命ありて後、紀年 復た洪武と稱す。是を嗣ぎて子孫・臣・庶 紀載するを以て嫌と爲し、草野 疑いを傳え、訛謬無きことあらず。更に越えて聖朝^② 論定を経るを得て、「名を尊ぶは、壹惠もてす」、君德^② 用って彰らかなり、懿^②からんかな（欽定『明史』卷四・本紀第四・「恭閔帝」：以後の欽定四庫全書薈要・卷六千五百九十七史部『明史』卷四や欽定四庫全書『明史』も同文）。

①乾隆帝『御製樂善堂全集』卷四・「西漢総論」に「……惠帝 天資仁厚にして、乃ち呂後の虐に遭い、酒色に耽^{ふけ}り、以て自ら其の身を戕う……」。

②柳宗元の「故銀青光祿大夫右散騎常侍輕車都尉宜城縣開國伯柳公行狀」に「用って君德を彰らかにす」。

建文帝は、善政をおこなった。それらはすべて「民を恵むの大なる者」であった。ところが、永樂帝に政權を奪われると、年号は抹殺され、人々は記載することをしなくなってしまった。そのため誤謬が横行した。ところが、清朝になって、諡号が贈られることになった。すばらしいことではないか、という。

善政を行なったが、政權を篡奪した永樂帝によって抹殺された皇帝であったと言いたかったのであろう。そして「民を恵むの大なる者」から、「惠帝」を贈ったことを連想させるような書き方である。ところが、以下で検討するが、諡号からするとこれとは異なった理解ができる。

欽定『明史』の建文帝の賛からすると、清政權の建文帝に対する評価は、以上のようなものであった。では諡号からみるとどうであろうか。続けて検討してみたい。

まず乾隆帝に時に建文帝に贈られた「恭閔惠皇帝」の諡号であるが、「恭」字は、『史記正義』に引用される「諡法解」によると、つぎのようにいう。

賢を尊びて義を貴ぶを恭と曰う（尊賢貴義曰恭）。 賢人に賢事し、義士を寵貴す。

✓（2）『禮記』表記に、

子 曰く、先王 諡して以て名を尊び、節^すするに壹惠を以てす。名の行ないに浮^すぐるを恥ずればなり……（『禮記』表記）。

とあり、その鄭注に、つぎのようにいう。

「諡」とは行ないの迹なり。「名」とは聲譽を謂うなり。先王 行ないを論じて以て諡と爲すを言う。「以て名を尊ぶ」とは、聲譽をして得て尊信す可からしむるなり。「壹」は讀んで一と爲す。「惠」は猶お善のごときなり。聲譽衆多有る者と雖も、節するに其の行ない一大善なる者を以て諡と爲すのみを言う。上に在るを「浮」と曰う。君子

行ないを勸め功を成すも、[自分の] 聲譽 行ないを踰るは、是れ恥じる所なり。諡はその人の生前の名声を尊ぶためのものであり、多くの功績があっても、その中のおおきな善行の一つ選ぶのは、名声が功績を上回ることを恥じるからである、というのである。

事を敬して上を供じるを恭と曰う（敬事供上曰恭）。 供は奉なり。

賢を尊びて敬しみて讓るを恭と曰う（尊賢敬讓曰恭）。 有徳を敬し、有功に讓る。

既に過まち能く改むるを恭と曰う（既過能改曰恭）。 自から知るを言う。

事を執りて堅固なるを恭と曰う（執事堅固曰恭）。 正を守りて移らず。

民を愛して長弟（年上を敬い、年少を慈しむ）なるを恭と曰う（愛民長弟曰恭）。 長に順いて弟に接す。

禮を執りて賓を御するをを恭と曰う（執禮御賓曰恭）。 賓を迎待（迎える）するなり。

親の闕を^{おほ}芘う恭と曰う（芘親之闕曰恭）。 徳を修めて以て之を蓋う。

賢を尊びて善を讓るを恭と曰う（尊賢讓善曰恭）。 己の善を専らにせず、人に推す。

また、『逸周書』諡法解は、『史記正義』引用の「諡法解」とすこし異なる。いま、陳逢衡の『逸周書補注』によると、つぎのようにいう。

事を敬して上を供じるを恭と曰う（敬事供上曰恭）。『左傳』隱〔公〕元年の疏に「敬長供上曰恭」と引く。後漢の章德竇皇后の諡を「恭」と曰うの〔唐・李賢等〕注に諡法を引き「敬事尊上曰恭」とす。

孔〔晁〕注：供は奉なり。

補注：周王 伊扈は「共」と諡す。「共」と「恭」とは同じ。凌曙 曰く、按ずるに「檀弓」の「是以爲恭世子也」疏に〔晉獻公の太子〕申生 〔獻公の寵妃の驪姫にはかられたことを〕自ら理めず、遂に父（晉獻公）に子（太子申生）を殺すの惡有るに陥れる。心 孝を存すと雖も、理に於いては終に非なり。故に「孝」と曰わず、但だ諡して「恭」と爲す。其の父母に順なるを以てなるのみ。「諡法」に「敬順もて上に事うるを恭と曰う」と。

賢を尊びて義を貴ぶを恭と曰う（尊賢貴義曰恭）。

孔〔晁〕注：賢人に尊事し、義士を寵貴す。

賢を尊びて敬しみて讓るを恭と曰う（尊賢敬讓曰恭）。

孔〔晁〕注：有徳を敬し，有功に讓る。

既に過ち能く改むるを恭と曰う（既過能改曰恭）。唐の許敬宗の「謚議」に引くと同じ。『獨斷』は「既過」を「知過」に作る。

孔〔晁〕注：自から知るを言う。

補注：『左〔傳〕』襄〔公〕十三年の傳に「楚共王 卒す。子囊 謚を謀る。大夫 曰く、君に命有り、と。子囊 曰く、君（楚共王）〔謚を「靈」か「厲」にするように〕命ずるは共〔敬の心〕を以てす、之を若何ぞ之を毀たん。赫赫たる楚國にして之に君臨し、蠻夷を撫有し、南海を奄征し、以て諸夏を屬せり。〔そして自から〕其の過ちを知る、「共」と謂わざる可けんや、請う之に「共」と謚せんことを、と。大夫 之に従う」と。「共」と「恭」とは同じ。魯語〔下〕に「閔馬父 曰く、楚共王は能く其の過ちを知りて「共」と爲す」と、晉語に〔二〕「是を以て謚して共君と爲す申生を謂う」と。韋注に「謚法に既に過ち能く改むるを共と曰う（既過能改曰恭）と。國人 公に告げるに此の謚を以てするなり」と。又た楚語〔上〕に「「共」と爲さざる可けんや」と楚共王を謂う。韋注に「謚法に既に過ち能く改むるを恭と曰う（既過能改曰恭）」と。

事を執りて堅固なるを恭と曰う（執事堅固曰恭）。 正を守りて移らず。

孔〔晁〕注：正を守りて移らず。

補注：宋の共姫の火に逮びて死するが如きは、是れなり。

民を安んじて長弟（年上を敬い，年少を慈しむ）なるを恭と曰う（安民長弟曰恭）。「長」は上聲なり。「安」は盧本『史記正義』に従いて改めて「愛」に作る。

孔〔晁〕注：長に順いて弟に接す。盧文弨 曰く、「接」は本 一に「接」に作る。

疑うらくは二字 俱に誤れり。

補注：「長」は之を長養するが如し。「長弟」とは豈弟（和らぎ楽しむ）なり。

禮を執りて賓を御すを恭と曰う（執禮御賓曰恭）。盧文弨 曰く、「御」は舊と「敬」に作る。「正義」・「前編」 俱に「御」に作る。〔孔晁〕注も亦た「御」字を釋するなり。

[陳逢] 衡 案ずるに、「御」は當に讀んで「迓」の如くす。

孔 [晁] 注：賓を接待（迎える）するなり。

親の闕^{おほ}を芘^{おほ}うを恭と曰う（芘親之闕曰恭）。

孔 [晁] 注：徳を脩めて以て之を蓋う。

補注：『易』の所謂ゆる「父の蠱に幹たり（幹父の蠱）」（『易』蠱卦）なり。

魯語 [下] に閔馬父 曰く、周の恭王は能く昭穆^かの闕^{おほ}けたるを庇^{おほ}いて恭と爲す。注に庇は覆なり。恭王は周の昭王の孫・穆王の子なり。昭王南征して反らず。穆王 其の心を肆にせんと欲し、皆な闕失有り。恭王能く之^{おほ}を庇覆。故に「恭」と爲すなり、と。

長を尊びて善を讓るを恭と曰う（尊長讓善曰恭）。「長」は上聲なり。盧本 「史記正義」に従いて「尊賢」に作る。案ずるに、「尊賢」は前に已に兩たび見ゆ。

孔 [晁] 注：己の善を専らにせず、人に推すなり。

補注：「尊長」とは齒（よわい）を尚とぶなり。「讓善」とは徳を貴とぶなり。淵源流通するを恭と曰う（淵源流通曰恭）。盧文弨 曰く、案ずるに「正義」は文・武・成・康・昭・穆を以て次と爲す。其の「淵源流通曰恭」は、「溫柔好樂曰康」の三句の前に在り。今、此に錯簡し、「康」を改めて「恭」と爲すは、本文に非ざるなり。又た『書』正義に引きて「淵源流通曰禹」に作る。案ずるに『獨斷』に堯・舜・禹・湯の脉有り。『史 [記]』正義 僅かに「除殘去虐曰湯」の一謚有るのみ。而して此れ之れ無し。然れども案ずるに『書』湯誓の釋文に馬融の説を引きて謂う、禹・湯は皆な脉法の中に在らず。故に今は亦た之を闕く。

孔 [晁] 注：性 忌む所なし。此の注と正文と合わず。蓋し「恭」の脉下、孔 [晁] 注を脱去す。而して此の注は又た正文の一條を脱去す。故に兩ながら相い附せず（『逸周書補注』卷十四・謚法解第五十四・九葉～十二葉・「敬事供上曰恭 / 尊賢貴義曰恭 / 尊賢敬讓曰恭 / 福過能改曰恭 // 執事堅固曰恭 / 安民長悌曰恭 / 執禮御賓曰恭 / 芘親之闕曰恭 / 尊長讓善曰恭 / 淵源流通曰恭」条）⁽³⁾。

つまり、「謚法解」・『逸周書』謚法解によると、「恭」には、賢者や義を尊ぶ、

✓ (3) 朱右曾の『逸周書集訓校釋』は、つぎのように注釈する。

敬事尊上曰恭・尊賢貴義曰恭・尊賢敬讓曰恭・既過能改曰恭・執事堅固曰恭・安民長悌曰恭・執禮御賓曰恭・苾親之闕曰恭・尊長讓善曰恭。

「敬事」は、位に懈らず・「尊上」とは、難きを君に責むなり。「尊賢」は則ち嚴憚・「貴義」は則ち齋肅なり。有徳を敬し、有功に讓る。過てば改めるに憚ること勿れ、能く自から拱持す。「執事堅固」は奉承して失わざるを言う。愛を以て民を撫す、慈しみを以て字幼、皆な「恭」の道なり。賓客は恭しきを主とし、禮を執りて以て之を迂^{むか}えるなり。之に親しみ闕失（錯誤）あれば、徳を修めて以て之を蓋うなり。「讓善」とは、己 善有りて之を人に讓るを謂うなり。

「尊上」は、舊と「供上」に作る。『後漢書』寶皇后紀注に據りて訂す。『禮 [記]』檀弓の疏に引きて「敬順事上」に作り、『左傳』疏に引きて「敬長事上」に作るは、俱に非なり。「長弟」は、『通鑑前編』に「悌長」に作る。王念孫 曰く、「長弟」とは仁愛の意なり。齊語に「郷里に長弟ならず」と云う、是れなり（『逸周書集訓校釋』卷六・諡法第五十四・「敬事尊上曰恭・尊賢貴義曰恭・尊賢敬讓曰恭・福過能改曰恭・執事堅固曰恭・安民長悌曰恭・執禮御賓曰恭・苾親之闕曰恭・尊長讓善曰恭」条）。

また、欽定『續通志』（乾隆五十年（一七八五）成る）は、「諡法解」を引用して、つぎのような注釈をつける。

事を敬して上を供じるを恭と曰う（敬事供上曰恭）・賢を尊びて義を貴ぶを恭と曰う（尊賢貴義曰恭）・賢を尊びて敬しみて讓るを恭と曰う（尊賢敬讓曰恭）・事を執りて堅固なるを恭と曰う（執事堅固曰恭）・民を安んじて長悌（長悌：敬長愛幼；仁愛）なるを恭と曰う（安民長悌曰恭）・禮を執りて賓を敬するを恭と曰う（執禮敬賓曰恭）・福に過ち能く改むるを恭と曰う（福過能改曰恭）・親の闕^{おほ}を庇^{おほ}うを恭と曰う（庇親之闕曰恭）・長を尊びて善を讓るを恭と曰う（尊長讓善曰恭）・淵源流通するを恭と曰う（淵源流通曰恭）。『史記正義』は別に「淵源流通曰康」に作る・「安民長悌」を「愛民長弟」に作る・「尊長讓善」を「尊賢讓善」に作る・「執禮敬賓」を「執禮御賓」に作る。攷うるに孔晁の注に「賓を迎待（猶迎候）するなり」と云う、則ち「敬」は當に「御」に作るべし、讀むこと「迂」の若くす。「福過能改」は、『獨斷』に「知過能改曰恭」に作る。

福に過ち能く改むるは、楚の恭王 是れなり。「親の闕を庇う」は、周の恭王・晉の恭世子 是れなり。『左傳』に、楚の恭王 卒し、子囊 諡を謀りて曰く「赫赫たる楚國にして之に君臨し、蠻夷を撫有し、南海を奄征し、以て諸夏を屬せり。〔そして自から〕其の過ちを知る、「恭」と謂わざる可けんや」（『左氏傳』襄公十三年傳）、と。『國語』晉語 [二] に、人 申生に謂いて曰く、子の罪に非ず、何ぞ去る可からざらんや、と。申生 曰く、去る可からず。罪 釋さるるも必ず君に歸す。是れ君を惡むなり。父の惡を章かにし諸侯に笑われれば、吾 誰に郷^{むか}えて入らんや、と。是^{こゝ}を以て諡して「共君」と爲す。又た魯語 [下] に、閔馬父 曰く周の恭王は能く昭穆の闕を庇いて恭しと爲す。楚の恭王は能く其の過ちを知りて恭しと爲す、と。韋昭の注に云う、恭王は

つつしんで上を奉る、賢者を尊んでゆずる、過てば改める、正しい事を行なって変更しない、民を愛して年上を敬って年少を慈しむ、礼儀正しく迎える、徳を修めて多いつくす、自分の善行をひとにゆずるなどの意味があるとする。

蘇洵の「諡法」になると、謙讓して自分を養う、怠ることなく徳をなす、統治の法則を変更しない、困難なことを君に責める求める、過まってしまったことを改められるなどの意味であるという。

恭五

卑（卑下した態度）^{やしな^①} 以て自ら牧うを恭と曰う（卑以自牧曰恭）。

新たに補す。「恭」の「敬」に異なる所以の者は、「恭」は謙恭と爲し、「敬」は恭敬と爲すなり。舊法 辨（はんべつ）するを知らず、故に特に之を著す。

①『易』謙卦に「謙謙君子，卑以自牧」。

②蘇洵より少し後になるが、朱子は『孟子』告子上「恭敬之心，人皆有之」条に「恭とは、敬の外に發する者なり。敬とは、恭の〔心の〕中に主とする者なり」と注している。

懈らずして徳を爲すを恭と曰う（不懈爲徳曰恭）。

治典（治國の法典）易えざるを恭と曰う（治典不易曰恭）。

^{かた}難きを君に責む^{もと}を恭と曰う（責難於君曰恭）。

孟子^① 云う。「敬」注に見ゆ。

①『孟子』離婁上に「^{かた}難きを君に責む^{もと}，之を恭と謂う。善を述べ邪を閉ずる，之を敬と謂う」。

既に過ち能く改むるを恭と曰う（既過能改曰恭）。

楚子 將に死せんとす。大夫を召し、諡を請い、之に告げて、諡を「靈」

^{もし}若くは「厲」と爲さんことを請う。其の常に師を鄢に喪うを以てなり。

周の昭王の孫・穆王の子なり。昭王 南征して反らず。穆王 其の心を肆にせんと欲し、皆な闕失有り。恭王 能く之を庇覆（おお）うす。故に諡して「恭」と爲すなり、と。「恭」は或いは「共」に作るは、古「共」と「恭」とは通ずればなり（欽定『續通志』卷一百十九・諡略上・「周書諡法解」条）。

卒するに及び、諡を謀るに、大夫 曰く、君に命有り、と。子囊 曰く、君（楚共王）「諡を「靈」か「厲」にするように」命ずるに恭「敬の心」を以てす、之を若何ぞ之を毀たん。赫赫たる楚國にして之に君臨し、蠻夷を撫有し、南海を奄征し、以て諸夏を屬せり。〔そして自から〕其の過ちを知る、「恭」と謂わざる可けんや、請う之に諡せんことを、と。大夫 之に従う（『左氏傳』襄公十三年傳）、と。故に後世 因りて「既に過ち能く改む」を以て「恭」と爲す（蘇洵「諡法」卷二・「恭五」条）。さらに、「恭」字は、『通志』諡略では、「上諡法」の百三十一字の中の一字に分類され、

右、百三十一の諡は、之を君親に用う・之を君子に用う（『通志』卷四十六・諡略第一・諡中）。

といわれる。君親や君子に用いる文字であるとするのである。

欽定『續通志』（乾隆五十年（一七八五）成る）には、明朝が新たに増した諡の意味として、つぎの二条を増している。

敬順もて上に事うるを恭と曰う（敬順事上曰恭）

正徳美容なるを恭と曰う（正徳美容曰恭）（欽定『續通志』卷一百二十・諡略中・「明通用諡法新增義」条）。

また、「閔」字は、欽定『續通志』によると、「愍」字と同じであるという。國に在りて難に遭うを愍と曰う（在國遭難曰愍）・國に在りて憂に連なるを愍と曰う（在國連憂曰愍）・禍亂 方に作らんとするを愍と曰う（禍亂方作曰愍）・民をして折傷せしむるを愍と曰う（使民折傷曰愍）『史記』正義に「難」を「難」に作る。「連」を「遭」に作る。「折」を「悲」に作る。『獨斷』は止だ「在國遭難曰愍」のみ。

古は「愍」と「閔」と通ず。故に凡そ春秋の時の「閔」と諡する者は、皆な即ち「愍」なり。又た「潛」と通ず。『史記』に「宋閔公」・「魯閔公」は、皆な「潛」に作る。〔閔・愍・潛の〕三字は實に一義なり。又た南宋以後、兼ねて「憫」字を用う。宋の張廷堅は紹興の時に「節憫」と追

諡さる。遼の托卜嘉は道宗の時に「貞憫」と諡さる（欽定『續通志』卷一百十九・諡略上・「周書諡法解」条）。

「閔」字と「愍」字とが通用されるとすると、「愍」は、『史記』正義所引の「諡法解」⁽⁴⁾には、

國に在りて憂^①に遭うを愍と曰う（在國遭憂曰愍）。

國に在りて難^②に逢うを愍と曰う（在國逢難曰愍）。

禍亂 方に作らんとするを愍と曰う（禍亂方作曰愍）。

民をして悲傷せしむるを愍と曰う（使民悲傷曰愍）。

①②『逸周書』諡法解は、「在國遭憂曰愍」を「在國遭憂曰愍」に、「在國逢難曰愍」を「在國連憂曰愍」に作っている。『逸周書集訓校釋』（卷六・「在國遭憂曰愍／在國連憂曰愍」条）では、「難」と「憂」とを、「難は外患なり。〔それは〕災癘水旱・民夭折多きなり。憂は、内難なり」と注している。

とある。

(4)『逸周書補注』は、つぎのような注釈をしている。

國に在りて難に逢うを愍と曰う（在國逢難曰愍）。「難」は去聲なり。『獨斷』同じ。「史記正義」は、「逢難」に作る。『左傳』閔公の釋文は、「遭難」に作る。疏は、「逢難」に作る。『穀梁』閔公の疏 同じ。

孔〔晁〕注：兵寇に逢うの事なり。

補注：愍は憂なり、痛なり。欽定『續通志』諡略に曰く、古は「愍」と「閔」と通ず。故に凡そ『春秋』の「閔」と諡する者は、皆な即ち「愍」なり。又た「潁」と通ず。『史記』は、宋閔公・魯閔公を皆な「潁」に作る。三字は寔に是れ一義なり。又た南宋以後、兼ねて「憫」字を用う。宋の張廷堅 紹興の時に「節憫」と追諡さる。遼の托卜嘉 道宗の時に「貞憫」と諡さる。〔陳逢〕衡 案ずるに、〔『漢書』古今〕「人表」は、宋の愍公を「敏公」に作る（中華書局本『漢書』古今人表・中下には、「愍」に作る）。民をして悲傷せしむるを愍と曰う（使民悲傷曰愍）。盧文弨 曰く、折は「正義」前編「悲」に作るは非なり。

孔〔晁〕注：苛政 賊害す。

國に在りて憂に連なるを愍と曰う（在國連憂曰愍）。盧文弨 曰く、「正義」・「前編」は、「連」を「遭」に作るは非なり。注の「仍」は正に「連」字を釋す。

孔〔晁〕注：大喪の多きに仍る（仍多大喪）。

禍亂 方に作らんとするを愍と曰う（禍亂方作曰愍）

孔〔晁〕注：國に政無ければ、動もすれば長く亂る（『逸周書補注』卷十四・三十八葉～三十九葉・「在國逢難曰愍／使民悲傷曰愍／在國連憂曰愍／禍亂方作曰愍」条）。

蘇洵の「諡法」では、

國に在りて難に逢うを愍と曰う（在國逢難曰愍）。

或いは「閔」に作る。『史記』魯閔公・宋愍公の類は、皆な「潛」に作る。

義 同じ（「諡法」卷四）。

という。

つまり、「愍」には、国内において災害や外からの災難に遭遇する・戦乱が起ころうとする・人々を悲しませることなどの意味があるというのである。

また、「愍」字は、『通志』諡略では、「中諡法」の十四字の中の一に分類され、右、十四の諡は、之を閔傷に用う・之を後無き者に用う（『通志』卷四十六・諡略第一・諡中）。

悲しむべきことや、後が無い者に用いる文字であるとされる。『通志』諡略では、「愍」字は、「殲夷（誅滅すべき人）」や「小人」に用いる「下諡法」には分類されていない。「愍」字は、完全に否定する意味ではない文字であった。

なお、「愍」字の諡をあたえられた皇帝には、晋の愍帝と後唐の愍帝がいる。そして、「恭愍」と贈られた人には、

後漢の順帝（安帝の子）の母の李氏。

（李氏は安帝の皇后の閔皇后に害される。閔皇后が太后となり権力を握っている間は、その事実を知らされず、閔太后の没後によりやく知り、「恭愍皇后」と諡される）。

北宋の唐重（字は聖任。眉州彭山の人。大觀三年（一一〇九）の進士）。

（金軍と戦い亡くなる。後に「恭愍」が贈られる）。

がいる。

明の時代、「恭愍」が贈られたのは、『弇山堂別集』によると、つぎの四人であった。

文臣御史・贈太理寺左寺丞 鍾同 成化 追諡す。

右、難を君に責め、國に在りて難に逢う。

左布政使・贈光祿寺卿 陳選 正徳。

右、敬順もて上に事え、國に在りて難に逢う。

武臣 泰寧侯・贈寧國公 陳瀛 天順。

右、敬順もて上に事え、國に在りて難に逢う。

番王 高麗國王 王顥 洪武。

右、敬順もて上に事え、國に在りて難に逢う（『弇山堂別集』卷七十二・諡法三）。

鍾同（字は世京。江西永豊の人。永樂二十二年（一四二四）～景泰六年（一四五五）。景泰二年辛未科（一四五〇）三甲一百一名の進士）は、捕虜になった英宗の皇太子（憲宗）を再び立てることを景泰帝に願い出て、その怒りを買って、下獄し、杖されて亡くなる。

陳選（字は士賢、号は克菴。浙江臨海の人。宣德四年（一四二九）～成化二十年（一四八六）天順四年庚辰科（一四六〇）二甲十一名の進士：會試の會元）は、清官として活躍したが、廣東左・右布政使であった時に、憲宗朝で権力をにぎっていた宦官の梁芳につらなる廣東市舶太監の韋眷と対立し、誣告され、召喚される途中で発病し、医者に診てもらうことを認められずに亡くなる。

陳瀛は、英宗の正統十四年（一四四九）七月辛酉に土木堡で包囲され、壬戌に殲滅される。いわゆる土木の変で亡くなっている。

高麗の第三十一代國王の王顥（在位：一三五一年～一三七四年）は、太祖洪武帝が即位すると使者を送り、その指示を受けるが、洪武七年（一三七四）に権臣によって弑される。

さらに、『明史』（卷二百六十六・列傳第一百五十四）によると、陳良謨（初名は天工、字は士亮。浙江鄞縣の人。崇禎四年辛未科（一六三一）三甲十七名の進士）に、崇禎帝が煤山で亡くなったことを聞き、節に殉じたことによって、「恭愍」と諡されるが、清政権は「恭潔」に変更する。

「恭愍」が贈られたこれらの人たちの事績を見てみると、職務を忠実に果たしながら（後漢の李氏恭愍皇后は、後の順帝を生んだこと）、終わりを全うできなかった人たちに贈られていると理解できる。

また、すでに検討したように、南明政権は、建文帝の皇太子の文奎に「恭愍」の諡号を贈っている。

[崇禎十七年十月癸酉(十九日)] 宣廟(宣宗洪熙帝)の呉賢妃の尊號を復し、諡を上つて「孝翼溫惠淑慎慈仁匡天賜聖皇太后」と曰う。建文の故太子の文奎に諡して「恭愍」と曰う。皇弟の允熲呉王に「悼」と諡し、允熾衡王に「愍」と諡するを復す。允熾徐王は諡の「哀簡」を改めて「哀」と曰う。諸公主の駙馬は、皆な舊號を復し、皇少子の文圭原王に追封して「懷」と諡す(『南渡錄』卷之三・崇禎十七年甲申・「崇禎十七年十月癸酉(十九日)」条・一三七葉・浙江古籍出版社一九八八年刊)。

建文帝の皇太子の文奎については、『明史』列傳によると、

惠帝(建文帝)の二子は、俱に馬後の生なり。

太子の文奎は、建文元年 立ちて皇太子と爲る。燕師 入るに七歳なり。

終わる所を知らず(『明史』卷一百十八・列傳第六・諸王三)。

とされる。もちろん清政権は、皇太子の文奎に南明政権が贈ったこの「恭愍」は取り消している。清政権は、この「恭愍」の「愍」字を、通用する「閔」字に変更してはいるが、建文帝に贈っているのである。

では、「惠帝」の「惠」字はどうであろうか。「惠」字については、(2)で検討したように、建文帝の廟号として撰せられている。そして、「惠」字は、民を愛してあたえることを好む、寛柔の質をもって民を慈しむ、寛柔の質をもち諫めを受け入れた、という意味であり、蘇洵の「諡法」によれば、「愛を人に結び、禮を知らざる者」を意味するという否定的な意味を含んだものとなることを述べた。

ふつう、清朝においては、南明政権の贈った諡号などは、削除して用いない。なのに、「惠」字を用いたのはなぜなのだろうか。廟号とは異なると考えからなのだろうか。

管見のおよぶところ、「惠帝」とされた皇帝は、前漢の「惠帝」と晉の「惠帝」と五代十国の呉の「惠帝」と閔の「惠皇帝」である。⁽⁵⁾

前漢の第二代皇帝の恵帝（在位：前一九五年～前一八八年）は、十六歳で即位するが、呂太后に実権を奪われ、憂いて二十三歳で没すると呂太后が少帝を立て専制をはじめる。『漢書』恵帝紀の贊には、つぎのようにいう。

贊に曰く、孝恵 内は親親を修め、外は宰相に禮す。齊悼・趙隱を優寵し、恩敬 篤し。叔孫通の諫を聞けば、則ち懼然たり、曹相國の對を納れ、心説^{よう}こぶ。寛仁の主と謂う可し。[しかし] 呂太后の至徳を虧損するに遭^①うは、悲しきかな（『漢書』恵帝紀贊）。

①顔師固注に「趙王を殺され、戚夫人を戮され、因りて憂疾を以て政を聽かずして崩ずるを謂う」。

また、晉の第二代皇帝の恵帝（在位：二九〇年～三〇六年）については、在位中に八王の乱がおこり、王族の間で戦争が行なわれる。『晉書』恵帝本紀には、政治を行なうに堪えない人物であり、と臣下が好き勝手したという。

帝（恵帝）の太子と爲るや、朝廷 咸な政事に堪えざるを知る。[父の]武帝も亦た焉を疑う。嘗て悉く東宮の官屬を召し、尚書の事を以て太子（恵帝）をして之を決せしむ。[恵帝の皇后となる] 賈妃 左右を遣りて代對せしむるに、多く古義を引く。[すると]給事の張泓 曰く、「太子の不學は、

(5) 五代十国の呉の「恵帝」と閩の「惠皇帝」とについては、つぎのようにつたえられる。

呉の楊渭については、『舊五代史』僭偽列傳に、

渭は、渥の弟なり。既に立ちて、政事を咸な徐温に委ぬ。……[徐温は] 自ら兵柄を上流に握り、其の子の[徐] 知訓等 揚州に于いて居りて以て政を乗ること、凡そ十餘年。[徐] 温 乃ち[楊] 渭を冊して天子と爲し、國號を大呉とし、唐・天祐十六年を改めて武義元年と爲す。[楊] 渭は、[徐] 温を以て大丞相・都督中外諸軍事と爲す。[楊] 渭 僭號して凡そ三年にして卒す。諡して恵帝と爲す（『舊五代史』卷一百三十四・僭偽列傳）。

といわれ、閩の王鏐（王延鈞）については、

[王] 鏐 立ちて十年にして殺さる。諡して「惠皇帝」と曰い、廟號を「太宗」とす（『新五代史』卷六十八・閩世家）。

とされる。

閩の王鏐（王延鈞）は、不幸な終わり方をして人物としている。ただ、呉の楊渭の諡号については『新五代史』や『資治通鑑』などにはみえない。『舊五代史』は、乾隆元年（一七三六）には、復元されていなかったため、呉の楊渭の諡号を参考にした可能性は低いと思われる。

陛下（武帝）の知る所なり。今、宜しく事を以て斷つべし、書を引く可からず」と。[賈] 妃 之に従う。[張] 泓 乃ち具草（起草）し、帝（惠帝）をして之を書せしむ。武帝 覽て大いに悦ぶ。太子〔の地位〕 遂に安んず。大位に居るに及び、政 羣下に出で、綱紀 大いに壞る。貨賂（賄賂） 公行（公然と行なわれる）し、勢位の家 貴きを以て陵物（人を輕視する）し、忠賢の路絶つ。讒邪（讒佞奸邪の人） 志を得、更に相い薦舉す。天下 之を互市と謂う……天下 荒亂し、百姓 餓死す。帝（惠帝） 曰く、何ぞ肉を食わざるか、と。其の蒙蔽（愚昧無知）なること皆な此の類なり。後、冤（餅）を食するに困りて毒に中りて崩ず。或いは司馬越の鳩すると云う（『晉書』惠帝本紀）。

前漢の惠帝も晉の惠帝も、建文帝と同じく第二代目の皇帝であつた。その事績も、建文帝と似通っていたようにとれる。すると、清政權が重複を敢えてしてまで、「惠帝」としたのは、この二人の皇帝を意識していたとも考えられる。

すると、清政權は、建文帝に同情はしつつも、その事績を反映した帝号を贈ったと考えられる。それが南明政權と重なってまで「惠」字にした理由ではないだろうか。

おわりに

以上、検討してきたように、明代を通じて、建文帝は否定された存在であり、建文帝に諡号や廟号を贈ることは、何度も提案されてはきたが、実現しなかった。ただし萬曆年間に「國史」編纂に関連させて「建文」の年号の復活が認められた。しかし、「國史」編纂が頓挫するとともに、年号の復活もあやふやになってゆく。ただ明代を通じて、建文帝に対する同情は高かった。それが、形をとったのが、いわゆる建文帝の出亡（逃亡）説でなかったのだろうか。

南明政權は、建文帝の諡号を「嗣天章道誠懿淵恭覲文揚武克仁篤孝讓皇帝」とし、廟號を「惠宗」とした。ただし、「惠宗」については、元の順帝のものと重なることや「宗」をつけたことなどが顧炎武によって批判される。ただ本

来の諡の「讓」字には人に功績をゆずる意味も含まれ、実際に自分の地位を他人に譲った人に「讓」字が贈られている。また、「惠」字には、「惠にして政^{まつりごと}を為すを知らず」と譏る意味が含まれ、建文帝を否定的に評価しようとした諡号と廟号であったとも理解できる。

清代では、公式見解を示す欽定『明史』の建文帝の贊をみると、肯定的に評価されているようにとれる。しかし、建文帝に贈られた「恭愍惠皇帝」という諡を見ると、建文帝の事績を反映させた文字を選定している。清政権において、建文帝の諡号を撰んだ官僚は、かなり客観的に作業を行なったようである。その結果、建文帝にはよい諡号を贈ることはしなかったのであろう。